ひと・とき

63歳で司法試験に合格

憧れ現実に遅咲き弁護士

栗野 和之 さん 65

裁判所の職員を早期退職して、63歳で司法試験に合格した。昨年12月から県弁護士会所属の新人弁護士として活動している。

ここまで、通算20回ほどという挑戦の末、夢を実現させた。「この年だから無理だとか、恥ずかしいとか考えず、まずやってみることが大事」と、同年代へエールを送る。志したきっかけは、中学生の時に見た海外ドラマ。法廷で活躍する姿に憧れた。両親が、裁判所の職員だったことも影響した。

中央大法学部に進み1日12時間、勉強に励んだ。そして在学中の1977年、初めて司法試験に挑んだものの不合格。当時、合格率約2%という〝狭き門〟を突破できなかった。

卒業後も定職には就かず、年1回の試験を受け続けた。だが、結果は出ないまま年を重ねた。

古里の母親から「もう、無理じゃないかい。職に就かないままでは困るよ」と諭され、学んだことを生かそうと30歳代で、東京簡易裁判所の職員になった。

働く場が法曹界のため、司法試験の勉強は続け、試験も10回近く受験。その度に涙をのんだ。

そして、裁判所の仕事も多忙になり責任も増すなどしたため、「中途半端になってしまう」と一度、夢からは離れ、職場は山形地裁でも勤務した。

転機は、仙台地裁の会計課長だった2012年。退職予定者向けセミナーに空きがあったため、対象ではなかったが参加。

講師の「若いときに出来なかったことを（退職後に）、やってみては」という言葉に、眠っていた弁護士への思いに再度、火がついた。

前年に発生した東日本大震災の際、「困っている人に直接、寄り添いたい」と思っていたこともあり、そのまま早期退職。

13年から、57歳で東北大法科大学院（仙台市）に通い始めた。

同期は20歳代ばかり。年齢差を感じつつ、勉強に打ち込み、時には一緒に酒を飲み、相談にも乗って、2年間を過ごした。

卒業後、初めて臨んだ15年の司法試験はまたもや不合格。だがめげずに16、17年と受け続け、18年の試験で、晴れて合格を果たした。

大学3年生で臨んだ最初の司法試験から、実に41年を経ていた。「喜びというより、ほっとした気持ちでした」と振り返る。

なお、法務省によると18年は5238人が受験し、1525人が合格。その平均年齢は28・8歳だった。

合格後は、司法修習生として法律を学び、昨年12月に修了試験を突破。弁護士バッジを手にした。

現在は山形市の設楽法律事務所に所属。遺産相続、離婚といった相談を受けたり、県弁護士会の勉強会に参加したりしている。

夢がかない、心に決めているのは、法律に関する身近な相談の出来る弁護士として認められ、地域に恩返しをしていくこと。

「年は60歳を超えているけれど、気持ちや体はまだ40歳代。何か困っている人がいれば、どこでも、駆けつけますよ」

（井上勇人）

◇あわの・かずゆき　1955年、鶴岡市生まれ。山形市内で一人暮らし。趣味は旅行で、3年間をかけ、北海道の名所を巡ったことも。今は城や石垣を見るのが好きという。健康法はウォーキングで、歩数計をつけ、毎日1万歩を心がけているとか。相談依頼は、設楽法律事務所（023・622・6715）へ。